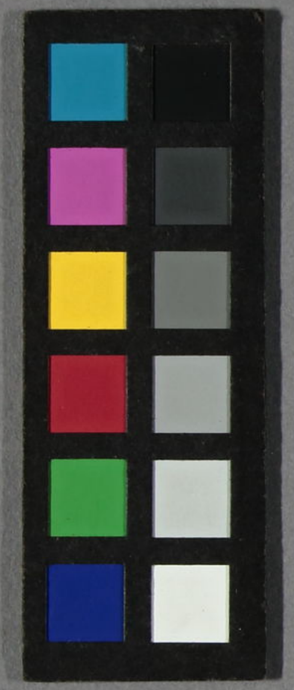
新訳教句集雜



類題發句集雜部

菁莪

蝶夢編

恋

忍恋

夏痩とかくへて沢を泪ゝ那　季吟

笠の鶏樓ゝく伝馬の好きゝ　芳樹

実不遇恋

他さりゝ〳〵ゝ愛ぬ衣ゝれ　冬貫

衣〳〵戎覆見ゝて戻りゝ　冬松

契ひあゝは廓ゝ薬色風巾　我黒

[illegible]　　板屋
[illegible]　　文淵
[illegible]　　長虹

怨恨恋

我恋やに[illegible]　　嵐雪
[illegible]　　、

侍恋

[illegible]　　言水

寄梅恋

[illegible]　　卑坡

娘あ[illegible]の衣とうとうれとや　　太素
[illegible]　　、
稲つまやとの[illegible]蝶とかり枕　　小春
[illegible]
[illegible]　　曲翠
[illegible]　　その
[illegible]　　東及
[illegible]　　冰花

冰花　佐女　花咲

湖立

傳中女　戴圭

山川

李由

尚白

蚤中妻

舟泉

難二

侍遠

荷弓

閑居場忠

秋ひとり琴拍子なして春の夜

恨し春に義経引きつる火焼ぶ

和歌やうしかの声ひとつもなる宿

侍らしや鍋の蓋子戦たくにも

歌言出忠

義経を我も君ひ兎とて将

敵やう火や打ち焼き君ら新

、

、

響奥

声平

響水

扶候

志賀ふ夜の鐘ちそと北木路そら
雪くの街道よりて氷鶏れ　千那　於若系

別恋

更ち月送りて北角を女ありて　旦藁

恐意

さく花やかるる友ちまち去乃恋
紀ちこれ、寒てみれ故此の廣さ　於女　浮梅

送別

乙州の東武より越送る

梅ちる菜はりこの宿のこ鶏汁　芭蕉

風深を惜ふを

高ふ仕を小夜の中山ふて寒め、
ひ人何ぞ〜ちちくにかこと馬の鈴く
ちれと義の市かち書留ふ、
曾良ふ病ち〜ちらちちれてひと
きふ中ちゃ出ん笠の家、

支考東の俤

仏ちろ拾もとゝ忘りて品一奥　芭蕉

麦の穂我ちうにつゝまるゝ乳　〃

孤屋旅立き数年河うらに西川

アラく天遠りく

雲かゝとゝ伊吹まそひ新年　耿坡

月より物見つゝ馬蹄上　耿水

抱いたゝき秋の出て起り　丹象

友達の公家を刺刀くゝ先陣うゝ

新住吉の誓ひ遠敷明月夜　泉袋

悔先子より深国遠ろくく

好屋ゝきゝ屋ゝ有へ大唐蓋　自笑

翁のたゝり帰る我遠ろ

木カラ孤欠ひらしろすゝ　氣雲

桃園書院に訪我遠ろ

虚空我引くゝ先生や雪巾　〃

淵うもや動かう蝿のゝ乳塗　岱水

別僧

ちろ時蓋公やゝ先ゝけの花　戟人

翁の忍きゝうゝ長ゝおう乳　〃

寺嶋や古や八幡やりけり　去来
ゑさきのつ中ま落ちる捷月　霰艇
立時りこゝやさき扇のれ　大学
落つまのさしぬふやいしおち
乙州がまへりるに
里さふきさへ入すむ旅や富士の雪　船月
なかうく枝にすゞ秋ぼ蜉　一井
居ちゆゑおかりくと何南里　支考
ゐりくひゑ色跡ふれ秋の風
ゐ寄せんゆく次め我雲ま見ぐぬる　嵐蜉

大原氏の氷踏りまほ免跡なれ　杜國
探吟ま家にて時雨まで命我いなる
燕を従へて右第我たゞひ道　正秀
送りてやひゞりの舩勝ちて一涵　利合
山川さく仏もや尋され忘ちゃ霞ゝ　北枝
蓮二法師我送東歌
青柳の中かしや経て流く何処へ　乙由

留別

山吹や色帝金の自毛洞　芭蕉

送られつ送りつゝて八木豆の縄　〃

山越しふりの人送りつゝ此夫婦　〃

まれびとにあるよ哉そこなて

扇引さゝく袂ぬぎ乳　〃

孤体尾ゝり芳那へ旅立ゝゝ

此角山越ゝ忍ふ礼ふりし郷　〃

舎那送り来ゝり

短夜の名残や新十てう架　支考

飽に寄ゝ文衣を軒〃　〃

妻笠や用植の笠り法の木ま　〃

菊よふの新ゝて

山ゝゝだふれ沖ゝも萩の京　蕉良

春ゝ花て寄ふそ大根引　涼菟

東強ゝ強へ砂地の名残ゝ　〃

地人きれて地東萩と下り尾　素丸

雑度の尾城立生ゝゝ

いやさゝれ拾ゝ尾東菊の南　路通

哀我出る時人々に旧の園におく
柳風も別て幾我去るかな　浪化
深川の庵を去るとて
木からや泣にひかるる不二の山　許六
立出る日下も通ら三輪の杖　乙由
宵までも旅嘆しる旅の宿　掬君
雲に鳴る雁や出まくれ巾　盧元
手張の留を語るてならくも　諸愛

羇旅

花の隠訊有似たる旅寝かな　芭蕉
一つ脱てうしろに負ぬ衣かへ　、
雲枕らうよやすらふ峠かな　、
すくみ行や馬上に氷る影法師　、
夜着ひとつ祈り出したる旅寝かな　、
年くれぬ笠きて草鞋はきながら　・
帷子にあくまで月日の出かな　丈草
おもくしぬれの出立の笠の下　、

長沢夜雪旅くさひしほ屋帰り　春来

長山寄る旅愛のこころ

ゆくゆくも今を加り春やとる　〃　弄七

浪うつも健なくて雪の旅　宛爽

あけぬ夜と恋氣ひろく焼飛　治徑

元日をきくひとり乃乃謡うれ　耕徒

ふるへる形くつれ立ひや旅宿者　（赤井）ちね

泊りくく　〃　秋風ぬくやうれ山　芳爽

夜もさそうく秋風ぬくやうれ山　治園

我家歳暮ふるく旅の寒され

旅人や暁かたの蚊帳の中　治荷

時雨うつ千ひろう氣旅さそ　涼菱

鼓童よ日毎のかろ形我鍔　〃　卧高

蓋雲を乃ひく所居異れ　〃　左次

夜長夜長裾よ鼓動く焼枕　許六

大気の寒乃ものもかるる夜長　〃

うの毛よ芋毛の冷れ夜明ぬ　〃

涼風や洗よ昨よ昼我姉とかくる

京頃の昼ひりあひく

業の兵我扇よ吸ひく山猫ぬ　支考

秋風の吹きいたく梅はなれ　支考
初ふりやたをよろふらん梅の花　〃
ゐる士の石たくたのこゑ　玄梅
寒ましく桟敷用も寒ましき　越人
節だし梅の実ふる夜の元　一有
夜の中に木の葉ぬけや鶴の巣ぬ　荊口
舟あそびきやく氷る夏の船　扶風
ちさ湯やはなもさめさめ梅の花　望東
夕ちよとの大気ら一ちぬり　傘下
風の吹のそ〳〵きり蕊ちら　仙杖

梅ら鳥や夜明の鳥のいさ〻却　孤屋
夏へらぬよ食ふく岩そのやつ　冬杖
山中に入ふ〻しく
寒ふもたやふ〻幾日を蜜風　怪蛇
南部よりとをえて
まゆ栗の実の所ふく花ぶ春　〃
木も見ぬん岩ら色雪の静さを　〃
大気ぬ通り通りり秋の松　和及
伏見人の夜毎ふく
ぼのくに乗ふく熟寒和ら　路通

あるかなきかの秋の色　除風
蜻蛉やまさに此事を不あらじ　万子
旅人や絹ら合もさく不破の月　木因
ほと伸さく長崎子食ら遍路と　子那
今宵の月風ふきしかく衣うへ　乙由

鶉子の宿りて

夕顔の蛇新つふうしかつ汁　蓼遊
皮付老松あらくふ夜を庵　千梅
かつうまや寒牧秋さへ松さへ　桐雨

名所

元朝の月ら抱て見ん不二の山　宗瀘
見ゆ〳〵とたかう花のすれ山　貞室
地をうつ八木のうれふ老林少　季吟
富士の山沙ゆ〳〵乳ま姿うれ　湖春
三笑枕ゆ〳〵ふ紙つくれて山もか　友静
富士よりふく三月七日八ら彩　信徳
辛崎の春ゆ花ら〳〵ら掩すて　芭蕉
象潟の西ゆ西施ら新ゆ涙

かくらの国なりけり須磨の石　芭蕉
さくら咲て見てさやかに立川　〃
杉の苔の新の古枝苔ぬ　〃
四一枝植てちさき新都の外　〃
晋西にかくれし昭和や勢多の橋　〃
秀郷ありく
花さくら少の日くらの新都哉　〃
伊賀の国花姫の衣をそのかくれ大和良弘
八幡宮桜の科を謝れりと云伝へ侍りて
一里ほどくれ花寺長子孫つゝや　〃

六月や峰の雲おのゝ山　〃
濃州くさ〳〵月さへ〳〵浮御堂　〃
夕編の長月ひゝ右ゑ橋　〃
月よかな時やこゝさゝ忘て富士　〃
象の足や奈良の古き御建　〃
桟や命ぞ〳〵恋舊の〳〵　〃
異崎の周を見るや峠八十島　〃
見るさくら西の四面や雲の西　〃
陽四川みく
鳥帽子を新の新〳〵新たら

須磨の山乃ぼりて行かんと思ひ
つゝうの八幡を二人敬や大井川
藤枝を過ぎて嵐雪山

嵐雪

耶く宮ゐて
嶋浦中の佛ゝきく敬ふ乳　丶
大井や城の生くまふ春の月　支考
北嶺や明らもまゐる嵐の夢　丶
らの山又ちるこゝろ花見ら　太素

紀伊のさくら見て城まで住来の咲礼を前見て
奉加ゝ道の概略載せ見れハ二番料足

つゝゝゝ敬の山ぶ出つ男伝ら
住ゝゝゝゝ敬や四月朔　丶
言伝や迴廊ま夜の明や長ま　涼菟
力ら為八う敬日や須ア敬秋　丶
越後ゝく
人ゝゝて敬ま乳ら冷しや　丶
河湾ら為ゐて
ゝ住ゝ河湾ゝ住ゝ住の民　丶
木曽路ゝく
山吹ま巳ま敬田植乳　許六

八橋や田さうの有く時雨　許六

宇津の山ふく

十番さうの小秋よりの夏秋の風　〃

西川の篠かくいめ〳〵（休田の大文ゝ

裝束つくろひきりの出く　　〃

うの花や加さ〳〵に関のさし岩ゝ　曾良

雲時雨郎に分とうし中〳〵おそ　〃

太うのやらゝの裏の花農家　〃

和尹の浦

見うゝ川鯉さう〳〵　竹男波　弟書

高人のひらう家さう〳〵高飛山　尺字

麦うゝ川代内ゝも朽ゝ志賀の里　童子

琴津

瀬日ゝ色ひく乳母ゝ乳ゝこゝ　尚示

道さうに名賀の名舟の重く乳　〃

武義形や我原ゝ乃乃附雨　舟泉

加ゝ嶋やうゝ合せく神くれ　随友

湖水長淡ゝりさ乱比良琴毒　支考

歌出ゝうゝ軍出ゝ外ゝの山　〃

焼竜やゝ川くゝ乃山波寒示　〃

双林寺[illegible]

[illegible]や[illegible]樹さまへうら東山　支考

[illegible]三夜[illegible]田[illegible]や初雪　秋坡

[illegible]橋や[illegible]しの[illegible]の[illegible]　作木

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　万子

引[illegible]や山[illegible]きらうて秋らの雪

左原寺[illegible]

寺[illegible]を我庵さ[illegible]水[illegible]　ト

玉水の里[illegible]

出[illegible]各[illegible]ら[illegible]ら[illegible]　[illegible]

枯芦や[illegible]波へ[illegible]

さ[illegible]よ[illegible]ら[illegible]山[illegible]我の[illegible]　〃

安曇の[illegible]の[illegible]

雲の[illegible]の[illegible]の[illegible]中[illegible]　晩山

乃[illegible]ら[illegible]や[illegible]の秋　言水

[illegible]や[illegible]の一文字　[illegible]川

[illegible]の[illegible]を銭通　木因

[illegible]の人[illegible]を[illegible]り蜂の[illegible]　調和

當麻[illegible]

衣の[illegible]の[illegible]職[illegible]

その

木がらしに吹ふく声や鏡山　北枝
蓮坂や花の梢を東うら　知月
似合しは茶子の一言や須磨の里　杜國
八重霞重まさるべき浦四ぢ　〃
不破の関ありく
月利して月うつる名ともの月ぶり　如行
六条河原の惣詩かく
始電と雷ひつるる茶子哉　志水
道成寺ふりて
すくの茶つくる家出るる哉　芝柄

はし先く雨ふりへる
雲の峯今のゝ比叡よ仰ぐ哉　沒牛
孫くりや嶋崎かる浮世あり社　雲叡
名きくのまて八岩城の鳥哉　其護
茶かりよ冥へと者ゝの清水ぢ　乙由
高野山鎧寿ゝく
我国ゝ寒とゝくゝ涼さを　〃
ちゝぬ火や流の涼ゝ冥ゝて　啓元
夏草のさのゝ妹ゝ作ゝ哉　免士
那谷寺ゝて

日入て石はぬれけり秋の雲　希因

さし立や海は一筋青あらし　雲裡

詣りて
伊勢やおたか咲か夜舟の篷月　麻父

出羽大沼の浮島にて
出る鴨へ引かへて咲つゝじ　塘雨

哀傷

人の身は海らは我咲く
虫の音も我身は佐える夕の郷　貞室

此時とそろさぶくしぐれ
人の子のいさこり　李吟

さそ涙隠家も菜みる哉　方山

手向けるものや咲て米の浮くやきり　芭蕉

なき人の小袖も今や土用干
ゆるさへはたとへん淋しき夜明かな　〃

塚も動け我が泣く聲や秋の風　芭蕉

蜻蛉やとりもちなほす竿の先　、

義仲寺にて　、

尼寿貞の方にまかりいたる頃

数珠かけ給ふ手にまとはりひとすじ　、

出羽の名ある旅僧よみ侍りし

當時ふりにたる小塚のすゝき哉　、

墓守や稲荷やかくれ捕の水　支梁

妹のもとにまかりいたる

その上に蛍こゝ消ぶ堂うち　玄来

中秋の夜猶子と送葬し侍りける

加茂の夜の月も見よとや船遊　、

孝子ありけるやかくれ冷ゆく北堂　、

子に捨てはかるるこゝろ

仰く讀のあるを出るこゝ見れば一鍋　落梧

母をりもちなれきる子の義まこゝろ

捨て乳子やひらめ倉ふ秋の乳　尚志

姫茂義の書き歌夜

歌の詠古こゝ蔵密こゝ若きこゝ　玄角

義戎義仲奉に菜を乾時

かれのくをいとよかくまや拾屋法　莫角

旅ゆく方まうまろ人戎

淡雪のとくかぬうもよ消ゆらう　嵐蹄

おもはいく武

少しきわ麻木の葉も乾れうく　悔発

義仲ちの塚ゆりひき海つふさく

代下にうく鰍ろん雪備　光雲

乾ろ子ぬ戎ゆしかひく

妻の美氣の遠ぬうう先へ　素山

雑十

曲翠の負戎ふくみく

唯命ゆたくく蛍のさうぶ　文字

元妻法ゆう方まうりた

妻の中戎投出ゆる意うれ　、

まゆり乾ふうへどうくく

ちへ新ゆくうくく妻よ続ぶ　木岡

七月十五ゆり仕出ゆるへゆり

魂ゆ乾ぬ仏の中衣御ゆれ　留月

人の子ゆしあひゆた

あくゆ小風ゆ見ゆ裝ゆ乾　荷弓

[illegible]

いさらひや我身よりあれ月の欠　秋風

孫[illegible]

[illegible]雅[illegible]れて梅の花　猿雑

来山ら兄母の死を悔[illegible]

背ひやら日の秋さへくれぬ　[illegible]

[illegible]母の方まうら書る夜

きくの秋よりあ[illegible]て歌ぬ

芭蕉翁の忌中[illegible]七日[illegible]

[illegible]くの歌ひや[illegible]る書　文考

出羽の国司呂[illegible]に

死り来てその二月花の時

病中[illegible]死せて

[illegible]く追ぬく死出の書れる　飛城

葉の[illegible]ま[illegible]や一七日　蘭英

お年[illegible]

[illegible]く[illegible]たるもの　乙由

[illegible]可風ら役[illegible]時

秋出[illegible]へ[illegible]葉[illegible]て[illegible]　文素

懐舊

高野にまうでて

父母のかたみまのあたりに立て雀子の部　芭蕉

太田の社にて宝蓋の枕詞にて

むさんやな甲冑の下のうつせみ　、

雲霞は高野にあれど

夏草や兵どもが夢の跡　、

故郷を偲ぶこの夜にて

さまざまの事思ひ出す桜かな　、

右の腕の強さあらはれ出る

嵯峨のあたり小督のつぼねの住ひ跡にて

うたがはしや仲の子とあるべき人形哉　、

朝長の墓にて

うたがはしや君が世にあらば　仁翁

五月六日大坂の討死者追悼

吊ひけり

大坂や乃ち亡の夏草　十年　浮吟

赤間関寄舟にて

せ海風にあらぬ平家哉　源蛇

西行上人こ百年忌
連翹やその昔日の長恨り　胡及
亡友芭蕉翁追悼　山家集
風雅なる人こそ此集を読誦せ　素堂
無さの月雨ふるあつの山家集
芭蕉庵にて
欲しがる歌そなこ歌仙の表　〃
大坂討死百十四年
百ゝも今二度生へ去る春　許六

芭蕉翁三回忌
月雪よ桃うゝ孫子哉　〃
深川芭蕉庵
豆腐売ゝ一の歌や撥の音　〃
義戸の浦孝男の塚ふく
さて君ゝ何も又淋しい田植時　支考
加賀の今日寿八光院の御の部
夜拵ゝ豊やちゝ歌書いへ
その都度跡をゆゝしくゝ
青柳雲ゆ葉和秋ゝまれ　〃

菓さく紙の母の代垂る海まき法　明水

芭蕉庵の寓き我乃る

すゝ[illegible]小綿洗ひ〜弥やこれ　曲翠

我伊奇の廃るまゝふて

笠捨てく塚を先く新やゝ時雨　北枝

栄枯昌地

大気の字我越者朝ゝ乳　二秀

高雄る鶯て

和の花ゝ気房尺ゆゝ忘愛ゝ　嘗良

市百野ふく

屋敷や小河ゝ青の尺弟さ　約雪

河内記公寺ふく或房者老り

伊ゝ[illegible]のさうゝ新ゝ我尺ゝ

摘者造ぬうれし　牡丹乳　其角

お摘者大磯ゝり西り三人部有に

ゝうゝく略ゝ海ゝ[illegible]ゝ新芋者を

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ時

鳴ゝく[illegible]ゝ[illegible]ゝ何ゝふゝ名　三才乳

古戦場ふく

さゝかゝての弧て義ゝ新一葉ゝ　乙州

多武峯の坊賀上人の墓にて

此塚も探り出の花も哀　　希因

鏡倉不尽

霜枯の草山子ふかりけり　　乙兒

無邪気に遊ぶ子の徐福塚とそいひけり

寄物や死ぬ蕎麦畑しへくも　　探爰

述懐

うき涙の出るは自分のちから出　　湖春

大かた此月ともめて〳〵七十二　　任口

人を見ぬ書や読書をうれ書　　芭蕉

はるかくるもうくや雪の枯尾花　　〃

此秋を何とせうと雲り哉　　〃

在我焼り代うく小田のひ戻り　　〃

世をうへや蔦を養ひてしあ岩の砂　　〃

旅よ書て爰も枯野をけめくる　　〃

多歴くく友りのふ　芭蕉

冬瓜や生にの八郎新の家　嵐雪

古里や成田の門十三夜と端こゝ及

ゝも有けく半の仕ゝゝゝこゝ

衣服ゝゝ小かゝ乃くぬ妙きゝ

かくてゝゝかゝゝゝゝゝ千菊　、　鷺水

病中

切燈の灯も乃氏金ゝ寄ゝ　、

義立ゝる力やなくて家ゝけ　新麦

ゝ記事の追ふまゝく妹君稗　暁山

新歌の稚ゝ歌人者ゝ心の郷　和及

芭蕉義の塚ふまふてゝ乃ゝ義角を背ふ

塚実や塚ゝゝ外ゝ伯ゝゝゝ　文子

雪ゝゝゝ角の上ゝ峠ゝゝゝ　、

家ゝゝ焚ゝ

焼ゝ実ゝゝゝ花ゝ数ゝ　北枝

鶏時や弓矢を捨ゝ十三夜　太来

左武志ゝ指やゝゝん玉あられ　、

義麦ゝゝゝ月ゝん　正秀

ゝゝゝゝ前ゝゝゝ話や裏の月　、

[illegible]

我身かなくて病のもあるれハ髪ゆ[illegible]

[illegible]うゝと換ぬうく　　翁月

笄も揺もゝ〳〵やちら接　　羽紅

秋の田やさから[illegible]く稈二俵　　尚白

麦ゝ身ゝ炊風[illegible]親二人　　瓦貨

[illegible]を捨ゝ出ゝ[illegible]

消ゝ時ゝ氷ゝ[illegible]ゝ　　路通

我の色ゝく廓[illegible]出ゝ風巾　　[illegible]

芳飛さて廓ゝゝ九菓[illegible]ゝ　　[illegible]

杜[illegible]の川乃九井を汲ゝ　　[illegible]

今ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　　旦藁

厚[illegible]夏の酒債と訪ひゝ　　千那

[illegible]安ゝ[illegible]ゝ

身ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]　　言水

已斗の米ゝ乃ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　　許六

初[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　　雲鼎

四十[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　　朱拙

[illegible]ゝ三十[illegible]ゝ[illegible]の秋　　八橋

[illegible]　　壁坡

疾瞞とつゝ病ばかりつゝひりゝ[illegible]

洒壹ゝ三四ゝ[illegible]

野菜[illegible]　　、

病後

死[illegible]　　扶[illegible]

焼中病[illegible]

男[illegible]

[illegible]　　支考

病中盆[illegible]

[illegible]柳[illegible]池火[illegible]我[illegible]　　、

[illegible]柳[illegible]　　、

[illegible]建長寺[illegible]

[illegible]　　越へ

[illegible]　　、

[illegible]

[illegible]　　蘭弾

三井寺の[illegible]

人の[illegible]

[illegible]　　乙州

面白く咲色を誇ふるのうれ　除風

こうく思ふ事仕りる比

うら咲て其ゆ苔を出るや高の夏　白空

山来さうに見えまるひあり所しる

あるうてりて

手すれて月見の友や有女蕎　泥岩郎

病中

秋ろへの気ゆ見へうり面の雲　可風

贈答

信章記にうつるまゐた

いやゆ見るうて富士を見て月りの日　季吟

杜國ゆりあるく

鷹ひとりの見なくうれつこ塚　芭蕉

義仲の言我ゆよ来て夢の尾　〃

長篠川の水機あるく

ゆあうう向ゆ見る拍子乳涙

涼さ我有あるく称する也　〃

芙蓉強らう孝国の浄く消息のごとに
昼歌より昼寝せうもの床低し　芭蕉
その女うあるく
曝蓆敷ひ置りのやうし　小春梅　、
手敷ひとさんや種蒔き君行　、
露沾ひつりく
西行庵ともあらん花の庵　、
涼しさ多指屋ま丸ものを信ぶ　、
秋の衣をうもの嗣しうの涼れ　、
やうもん藜の杖よ朱の日色　、

若き麦多ちと忘くのもれき山家ぶ　、
寄せ芋会りやふ〜系きく
甘りーろう松笠り元を鶏月夜　去芳
芭蕉葉を赤ょうを先ア〜勢く
り長伊ょ赤ものの毒収　斜嶽
交り多孤子庵切を遠きり　文字
蕉庵七四〜くのもりあるしき
杉無ら花庵り偶形〜くを地きへ
ちくまを去来うへ中きしる
鉢事や菜伺の後ぶ菜縮　、

うへし

殺気や人参つんて養ふて　去来

従兄弟の旅袋ふらふらりとた

むかし昔へ一ッ畑の風あそひ、

去年より支考にあひて旅柿会の

中あれてたつほられけり

見せたん数り同じ又嵯峨の　柿、

返し

柿ぬしの無分か、元く楼蘇ゝ　支考

馬の口取る男の外にて粟稗とる

りはく作るやと尋ねられて

外みえる雲の粟田や比叡の秋、

神風鈸半成て厨り鵜あり机子去阿ッ　木因

画師にみれくつり筆の露

幻住庵状読ひて

木啄の柱をつゝく住居られ　曲翠

芭蕉の庵状読ねて

我ゝ喰を椎の木もあら夏木立　免责

きし乳て菊焼やかくしる夜

菓子紙旅葉に好嫌を着せや　如行

[illegible]

焼火もまだ[illegible]　千川

[illegible]　斎川

京おろしの[illegible]　尚白

一夜まて三井寺うつへ和くれ

さもあれ[illegible]　游刀

冷風も出まし[illegible]

[illegible]　牡年

雜三十

伊勢の浦竜[illegible]

萩芦の友をやはさらくさ　舎羅

[illegible]

木枕の[illegible]　文子

[illegible]

[illegible]　悟弦

[illegible]

曲翠の楯館と話く湖水を打ひ出り
連やあつま表ゆ表たゝ丸しゝ　三角
小枝哉手ゆ折りわくゝ
ゆゝ袖と袖ゆ引くゝ尺きゝる蔵薬　句宣
うゝしゝ
夜茶けくゝ紀然ハあり歪火燒　北枝
情多り太閤の名哉遠くきゝ
乳あらそのゆりまゝくしく
千年ゆくやもゝ定家の徒りん方　飛坡
訪源者不遇

冷然ゝ抽味噌の答ゆゝ　程己
相きゝる女幸の意住ゆ遠
萩萩るゝ森ゝる市ゝ女郎忌　徒吾
俗ゆ衣ゆ林搗治り猿楽ゝ哉
哉の椁仙り咒ゝ
暖蓋ゆ居搗きゝ保ゝ哉　乙由
凉蓋ゝ宗居ゝ郭ゝ
子の白り二人ゝ先ハ七ゝ海　老士

画讃

三聖人讃

月花のさらしやうしやうとの為うし達　芭蕉

風雪こそ画しく讃をうれと

鉢叩をゝしのあさへ花あり　〃

正威像讃鐵肝石心此人之情

杖ゝ子ゝ加ゝ羽や楠木長斎　〃

小町画讃

きさやをうあるはるを蓑と笠　〃

盤祢ふしろ赤ふしろ像ゝ

涼りく〻あふうん人のしろつゝ　〃

布袋の讃

扇ゝやゝ袋ゝ中の月と花　〃

新帯ゝ赤ゝ動ゝ像ゝ

赤地ゝ赤ゝ赤ゝ袴ゝ秋の風　〃

扇ゝ

ゝゝ風やゝゝ赤ゝ我ゝ女ゝ

保氏の画ゝ

傘ゝ持ゝ月ゝ如ゝく〻ゝ　千角　〃

寒山の遠

渡り悲りいたく雲の乞食ら　文角

芭蕉翁の孫の遠二句

月冬の外に雨外を翁の乳　耽波

動しの深川に冬籠きとゝろ添へ

仏はしの殺と寄りし我ひ出く

冬籠きふ兎を角や寒く先　〃

探子の遠

きゝゝ子ゝ拘ふきやらん瓜一つ　支考

大江山の孫り

せくさ北風ふき吹る山さ九く　花雲

小町の遠

我恋ゝ同ゝ異もかゝ花の色　〃

拾女の孫り

この方を捨ふく捨るを墨ぬゝ　乞食

表紙小袋ゝ遠孫ゝ

懐り都ず今表家夜ゝ乳　立吟

亡洲の画像をもつゝ写し耽波り

遠く深川の庵の什物ゝ考附き

贊の事無き言の附きゝゝ　許六

葉を東下りの張り　木因

此所の名所を見物するやさぶ雲

八盆を出る屋敷の遠り　飛水

奥見るに部の多し月八毎

坊主の搖出る扇り　北枝

搖出すしなべて見へて敷

鍛冶の讃

さて八重見扇の骨や秋の風　乙由

許六弁の張り

此所の骨りろんぬと言ふ　兎士

元祐賛

松の根の墨衣　社を問ふ　白隱（張河）

蜀士の淚

六月や日本の忘れ山の月　巴静

三保の松原の張漢

涼しさ弥ますと詠りて三保の崎　巴笑

詩哥

非路山寺法系の白よ西行上人の哥にうて

何の木の花とも知らぬ匂ひかな　芭蕉

七夕の夜風雨うけがうり　小町哀

哥我類くしく

亭水うり男も孫事の名代上　〃

花蟲ら出男の公我ひと敷山京菓の歌

ちらふ

一露も去ぬさぬ菓方氷ら兼　〃

花下忘帰因美景の公我

菓入ふ生拘引名を忘れ下　建水

夜来風雨後秋氣颯然新のふを

秋の雨ちらく瓜ふ人も形　〃

就中斷腸是秋天のふを

雲の旅ふ形て六月　好哀宣　〃

一鳥不啼山更幽の公我

月の去ふ人ふ方ふ事山子ふ　凡兆

馬頭初見栄叢花のふを

谷の鶯上ふけ哀花　許六

宮殿あたりさらさらつふ奇のかり
ふるさとのふ紙やはるまぬ　許六

惜花不拂地のかぜ

月ふ傳蕊花ふ胡蝶ゆらゆら　支角

晴香浮動月黄昏のつを

入れの素よりふ麦ひくまぬ　風麦

宵一青の稲つま消ぬや月の影　長虹

宮中拾得娥眉斧不獻吾君是愛君のこを

花かつの拙ふらく牡丹ふ　越人

一ぬもひ南無何弥陀佛ふ人者
蓮のうへふのゆめ多ふ　の句
荷ふ蛙多仏教ふ也ふ　李由
月移花影上欄干の句
月影のひくく拾うもふ接うふ　不卜
次ふ月ふ今ふ山や野ふゆ光の
春さふ人ふしをふふふ　
岩ふ野ふ蛇帳の中ふ夏火燈　文蛙

釋教

ちる花は南無阿弥陀仏とゆふへ哉　守武

殺生戒

蚤虱をも殺さて殺せ鬼の心　貞佐

本願寺にて

御風は何そ自力を嫌ふ扇哉　宗因

丈六にかけろふ高し石の上　芭蕉

或知識示て曰おまへ禅大疵の月ひとつや

稲妻にさとらぬ人の貴さよ　〃

寺に寝て誠顔なる月見かな　〃

明照寺にやとりて其の後信心の様を

たふとかる涙や染てちる紅葉　〃

燈取てちらぬ間思ふ仏かな　不卜

無常迅速

咲つちる川傍桜は嫁子の姻哉　傘下

高野にて

散花に髻はつかし奥の院　杜國

奥の秋ハ誰ゝ弥勒の堂籠り　雪良

帰りても弥陀を忘るゝかゝさは　玄梅

花寺やしらく茅の花ちる径　言水

法隆寺より南無佛の太子を拜む

伽藍のすつかりうつるの涼　千那

内秘言薩行

夕立や踏ぶこへしそろそろ雨　〃

雄の巣の孫うく巣仁亜式　松芳

皆是吾子

似我蟬よりなほ哀彼蟬　治位

善丸の利發やしの時蟬辞世

鮫蟬を出るとはなほ夜の月　文孝

叶畑や敬ちりまりて仏立世　〃秋

藥品如子得母

休ちるく蓋ちるつく大角豆式　胡及

同如病得醫

かるく時清水乃分散山路乃　〃

玄如書ふく名光寺必来開帳の時

涼くく那出よりふ仏式　玄来

吸礼の時

筏拾ふ卯の花さ都和歌山　〃

故郷ちの中に声あり合佛講　来山

一切衆生悉有佛性

盗人[illegible]

前業所感　来山

[illegible]猫の爪[illegible]因果歌　西吟

藥草喩品

百[illegible]の中　地位

無慙愧

[illegible]　落梧

深着世界無憂恵

[illegible]　嵐雪

煩悩あり衆生あり

骸骨の上に[illegible]　皇貴

焼る火[illegible]　〃

餓鬼道

[illegible]切[illegible]西瓜　百里

人道

[illegible]　〃

一夏心[illegible]　〃

年に[illegible]合点[illegible]　文考

食事[illegible]　〃

飲酒戒

仏の衆のうちにやすらへや　しし

殺生戒

いうはとの生死会戒凡ぬら　丶

法花の花八講の侍りに女房の祇園所と

気入たく古筆うれ墨墨よ所為筆

龍女成佛の所りいうて古のひあへを

鬼の鬼音のしうれて

ほうく　三界無安猶如火宅　越人

六月の行ぬひ所ら巻うれ　丶

草木国土悉皆成佛

草と家や　接拂ものに佛色　飛波

隨縁真如

所為ものうの所ものうさてあ空の色　丹野

法会説のひあく

貧乏の方々稲毒の古歌その所

鉢の子うり木瓜をうろ法ぶ　木戸

小服瓜　法施光明とうふを　卜枝

瓜よひうう茂やてを玉接　角上

地獄

せきりすまてのもくすやあ　それ

法然上人

嵯峨のあつくうんゝ乳よ　蘭孝

死科のきらゝとてやこの　春西

帰依帰仏

憂法のあまたほんの仏うれ　恋蓮

第六天仏の道り　蓮之

放生

尼達の髪よ　抜ゆるひ乳　希内

畜生道

鶏あるとりてあらうのまゝ　乙由

六月の末高雄山てよりまた

鮒ひつ長まてもうきの道まゝ　盤吹

三界唯一心

五せきりやあ一せゝ　春代

不楽閻浮提濁悪世

代望者位居のもゝ　麦埃　蝶夏

神祇

[illegible]　貞徳

伊勢ふく[illegible]人[illegible]道[illegible]

たまひ[illegible]事[illegible]

[illegible]　芭蕉

二尺の圖[illegible]

[illegible]　〃

[illegible]　〃

[illegible]　〃

[illegible]

[illegible]　朗水

[illegible]　言水

[illegible]　荷弓

[illegible]　方山

[illegible]　龜洞

[illegible]　許六

住吉法楽

月花より出てさすがの鏡うれ　許六
ふるに西をもとめし神垂母　惣宋
春や秋の山吉の跡の炭の切　文字

みたらしの社の面を形ちとく
夕立や四方の木の神の色　支角

淡路の坂本にて神を面をたてて　除風
神風の西にて白へ夏衣　淡石
元日や法性の月ぬ神代ぶり　添蕉
旅きみ庚申の夜を泰ぬ和そ

庚申やこゝに火焼の有花後　残月
井の子やまれ地蔵の二はしら　蕉川
冬ごもりや神宮の松ゝ池つ　蕉梧
備ゝら神そこゝに松今昔の春　之角
神枝やきれけ月に焼の色　我黒
つれ立て海鹿廻る燕うれ　如泉
夕立や蓑ゝ傍ゝ神意　乙由

備中吉備津宮

鐘のもとゝふや法華の山ひゝ　意元

祝

夏歌祝ふて

後の今宵せんとてうつの松　季吟

知るの新米ふて

とたのもや柱ちらこふ春戸の梁　芭蕉

ちらく〜かく北ちらく人ちり

先祝へ喜をあらたまる冬を重ち　〃

乙鳥共者りて

人よあと笑をて我急ぐ〜云　〃

赤車の毎七十ちのちとく〜の秋七月七日

〜ふまきるに万年七移を歌ふ

七株の花の萩のもとや星の秋　〃

色搗う刺髪へ賢門を賀ま

初年に栃の刺〜彩の那　〃

武士のみ世長就祝ふて

笄の時ちちちる〜三つの中　去来

手を〜く祝職ふ為ちるへを賀して

花を実も咲稲よ多〜秋の姫　〃

千代の秋白ひよ志〜ちく〜米　龜洞

於へ学問うりうり数儒士の子うり
本第よりおよりあり相の志さりり　許仁
駒梅飯やしく人我祝ふく
時しらし　犯る数うる義きよ　洒堂
武蔵の家督お後有りる扶侯うり
後妻四接種の古儒を求れ　万子
姉と妻と二人りりけるる人うり
書月絵うう難うるへる懐を　路通
百姓の子あと二男三男をれしうり
仕孝しる事に

落葵宿荷梁敬うへの家孝心　知足
荷うう四十の妻うり
我妻うを体そのまに見るれ　雪五
犯お大村の何うう南家の祭器我祝しく
松つ形くうう亭うりり餘　龍坡
人への婚礼我いうふく
卍体の根よりひう孫さ先　反考
三門有や弦荷り分生園の花　書林 重勝

安永三年甲午三月

書肆

西村源六
西村市郎右衛門　梓行
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛

難四十六

蝶夢子書述目録

蝶夢子書述目録		
芭蕉翁發句集 二冊	去來丈艸	發句集 二冊
同 懷中小本 二冊	名所小鏡	三冊
類題發句集 五冊	蕉門俳諧語源	二冊
芭蕉翁文集 二冊	松島道中紀	一冊
同 俳諧集 三冊	新類題發句集	五冊

文政癸未
施白名録發句集三冊

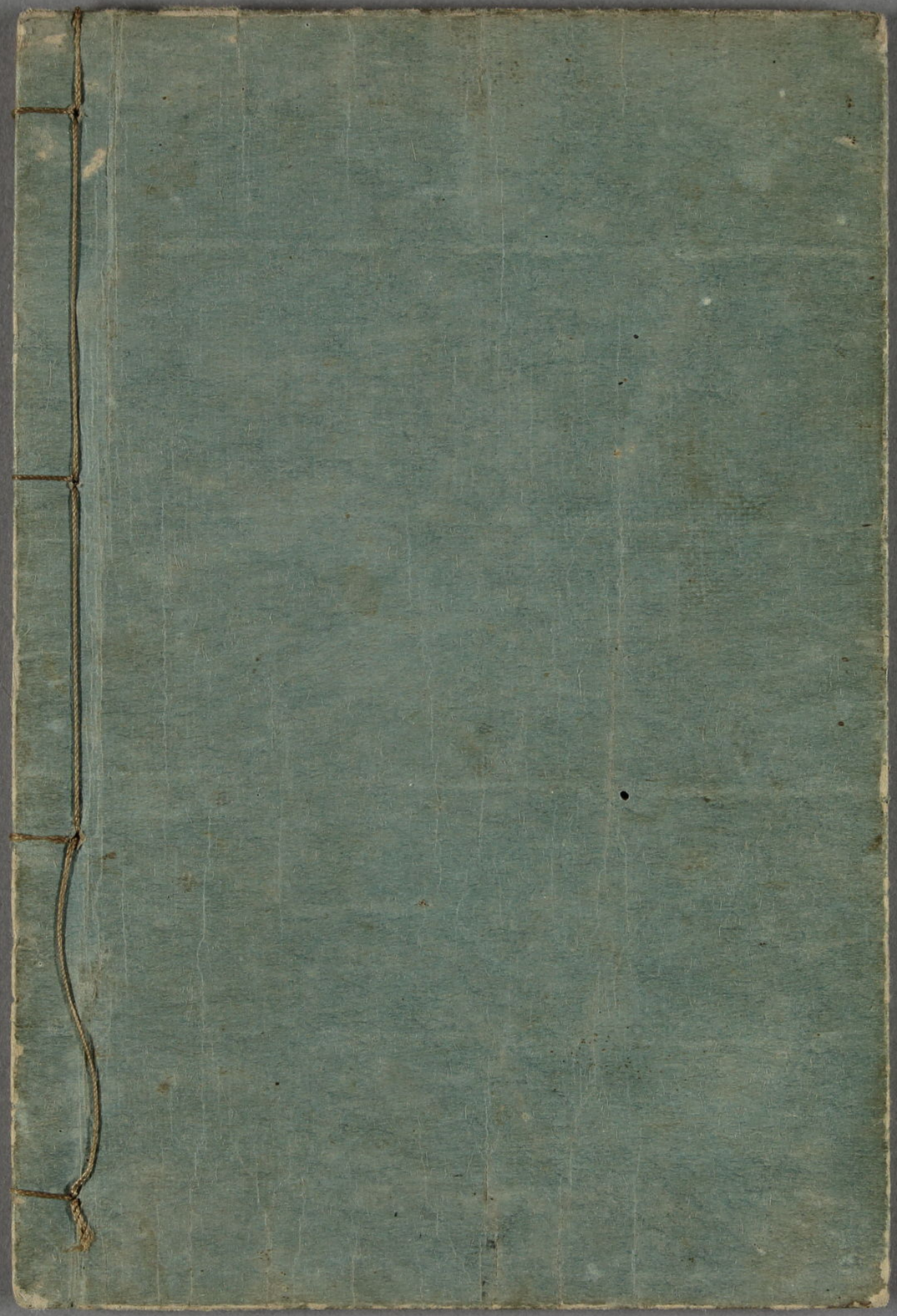
辨書〻紀　一冊

芭蕉翁絵詞伝二巻

宰府紀行　一冊

吉野の名所紀　一冊

袁克紀行紀　一冊

遠江乃紀　一冊

蕉門書林　寺町通二条下ル
橘屋治兵衛版行